

明けまして おめでとうございます

(市長)

平成27年から「住民自治によるまちづくり」がスタートしました。昨年12月の勝山地区まちづくり協議会の設立をもって市内全域にまちづくり協議会が立ち上がりまして、各地区のまちづくり協議会では、地域防災や地域住民の福祉などさまざまな活動が行われています。その中でも観光・産業の部会は地域振興を推進する大切な役割を担うこととなります。

本日は、参加された皆さんに、各地域資源について大いに自慢していただき、地域資源を活用した「おもてなし」での地域活性化の具体的な方策や可能性など率直なご意見を活発に交換してください。参加された皆さんの地域振興に役立てていただくことを期待しています。どうぞよろしくお願います。

可能性は無限大 自慢のまちの活動

(下本)

現在は4代目となる維新・海峡ウオークの実行委員長を務め、今年で7年目を迎えます。高杉晋作が眠る「東行庵」の3代目庵主の故・

谷玉仙さんらによって、晋作の偉業を後世に伝えるために始まったこのイベントは、今年で32回目を迎えます。イベントのマンネリ化を防ぐために、まだまだ改良するところがあります。子どもやお年寄りが気軽に参加できるように、短いコースを設定したり、健脚コースも考えていきたいですね。

前田の辺りから、火の山のユースホステルへ続く道をコースに取り入れてみようかなと。関門橋が見える絶景で、距離的には変わらないけれど、坂道で健脚コースにもってこいだし、トルコチューリップ園もありますしね。

参加する方が飽きないように、毎年様変わりして楽しめる維新・海峡ウオークにしたいと思っています。

人口減少の対策は、吉田地区でも課題です。昨年の8月、東行忌に7年間ずっと大阪から参加されている方に声を掛けたいです。そしたら「私は高杉晋作の大ファンで、高杉が眠る吉田に住みたい」と言

“飽きのこない、毎年楽しめる 維新・海峡ウオークに” (下本)

つてくれて、一年前から自分で就職口を探して、最近、吉田に子どもと家族3人で移住されました。その時、既に独自の吉田のまち

づくり協議会を立ち上げており、空き家情報を収集していたので、紹介してあげることができました。

(川田)

私は道の駅きくがわの管理事務所に勤めています。菊川の自慢は、フリーマーケットを毎月開催していることです。今年、30回目を迎えます。

“継続できるのは、支えてくれる 皆さんのおかげです” (川田)

市内だけでなく、北九州、長門、萩からの出店もあり、お客様にもお越しいただいています。それだけ続くのは、支えてくれている皆さんのおかげです。

フリーマーケットは毎月最終日曜日にしています。出店は開催月の1日から予約を受け付けていますが、すぐに希望者でいっぱいになるほど、皆さんに親しんでもらっています。

(和田)

下関観光キャンペーン実行委員会の戦略部長になったのが、今から17年前のことです。その時から、デスティネーションキャンペーンは今回で3回目を迎えます。

「官民一体」で、歴史観光、国際・国内観光、産業観光、まちづくり観光、この4つのキーワードを並べて、組織力と市民力と皆さんの

英知を集約して、一緒に手をつないだら、より観光客が増えるんじゃないかという思いで17年前から続けています。

その活動が認められ、日本観光協会からは「産業観光100選」に、総務省からは「地域いきいき観光まちづくり100」に選ばれました。

今年JRの豪華寝台列車「瑞風」の運行が開始され、9月には山陰本線の新車両もできます。これにプラスして、スポーツ・文化・歴史をミックスして誘致できるのは山口県下でも下関だけなんです。クルーズ客船の寄港も、海外のお客様も非常に多いですね。

“組織力と市民力、英知を 集約して取り組む” (和田)

ある大学の先生が新しい公共非営利のマーケティングで、官民一体となって行っているキャンペーンの事業を「下関モデル」として集約したものは、他の大学で観光事業論の教材として使われています。

市長が常々言われている「下関の夜景を売るんだ、海峡を売るんだ、それによって宿泊者を増やすんだ」というのが、一つずつの積み重ねでようやく今実を結び、まちの声とおお客様の声から、門司港の夜景



左：道の駅きくがわ(店内)
右：維新・海峡ウオーク
(吉田・東行庵付近)



左：好評の観光ガイドと歩くハイキング(小串駅(豊浦町)にて)
右：伊藤さんは古里の良さを知ってもらうために、小学校で授業を行っています。

“子どもたちに古里の良さを知ってもらいたい” (伊藤)

子どもたちの発案で、観光協会で作ろうとなりました。

より下関の夜景の方がきれいだったと言われるようになりました。平成10年に門司港レトロができた時には、向こうはずいくなってみんなが言っていたのに、今は下関の夜景の方が抜群にいいと言われます。

(伊藤)

私が今一番力を入れているのが子どもたちに古里の良さを知ってもらいたいという取り組みです。そして、もう一つが有害鳥獣肉・ジビエです。

豊田といえばホテルですが、子どもたちに乗船場やホテル舟の清掃を手伝ってもらっています。毎年豊田町内の小学6年生全員をホテル舟に招待しています。

ホテルを通して環境問題もしっかり取り組んでもらえるようになりました。それに子どもたちは発想が豊かなんです。彼らの発想がきっかけで、今、取り組んでいるのは「E-POCスタンプ」。現在は携帯は無料アプリ「E-POC」が主流なので豊田町のマスコットキャラクター「ほたるん」の「E-POCスタンプ」を作って欲しいと

来年ほたる祭りが50周年なので、その記念に豊田町出身のデザイナーにデザインしてもらい、「E-POCスタンプ」を開発する予定となります。ぜひそのときは皆さんご購入ください。(笑)

(上田)

“地域の歴史や魅力を物語で伝える” (上田)

豊浦町には、里山里海の自然があり、縄文・弥生の昔から人が住

営めることで、地域の拠点施設として機能しています。私は以前、奈良県の役場に勤めていました。地元のみちづくりにも参加していました。その時に、全国の事例をあちこち調べたら、川棚温泉では民間出資のみち株が地域経営の発想でまちづくりに取り組んでいるのを知りました。それが今、豊浦町で働いている最初のきっかけです。

私は川棚温泉まちづくり株式会社の事務局長をしています。「まち株」は川棚温泉交流センター(通称・川棚の杜)を指定管理で運営しています。川棚の杜には、鳥山民俗資料館、観光協会、コルトーホールと言ってみれば全然関係のない施設が同居しているのですが、まち株が一括して運

んでいた歴史もあります。江戸時代から続く湯治場の温泉文化に、瓦そばという名物もあって、多彩な地域資源に恵まれています。でもこれらを「自然がいっぱい、歴史も豊か」と言ってしまうと、せっかくの当地ならではの魅力が魅力的に伝わらないんですね、個性が見えなくなる。

その点、豊浦町では、地域の魅力を青龍伝説や毛利のお殿様、山頭火、コルトーの物語で発信してきました。

また、川棚の杜を設計したのは隈研吾さんです。2020年のオリンピックの新旧競技場を設計されることもあって、建物見学のお客さんも増えてきました。限さんとの出会いも地域の魅力を物語で伝えようとする取り組みがご縁でした。

川棚の杜が完成して7年になりますが、おかげさまで来館者はずっと増えています。面白いのはそれまで減少していた宿泊客も増加に転じたことです。われわれが直接増やしたわけではありませんが、まち株が、川棚の杜を拠点に、この地ならではの地域資源をいろんな切り口で活動展開することで人がやって来て、雑誌やテレビの露出も増えます。何かしら人目に触れる機会や話題を提供することで、行ってみよう、泊まろうの可能性とチャンスが高まって、観光消費

“観光をPRしながら、移住希望者への橋渡しも” (菊地)

の仕事をしたいから海があってほしい、そんな場所を探していました。

ご存知の方もいると思いますが、私はもともと下関市民ではなく、岩手県の宮古市から移住してきました。両親が被災してしまい移住を考え、両親がどういうところなら住みたいかなと考えた時に、自然が豊かで、車で1時間繁華街のある、海

に波及効果を生んでいるのは、観光振興と地域の持続性を両軸両輪にして、ぶれずに取り組んでいる成果だと思います。



道の駅北浦街道 豊北